

〔論文〕

(続)中国古文献に見える沉香について(下)

— その木と名称 —

高橋 庸一郎

はじめに

この小論は『阪南論集・人文科学編・第二十四巻二号』掲載の拙稿『(続)中国古文献に見える沉香について(上)』に続くものである。前稿では、沈香の木なるものが歴史文献上だいたいどのようなものとして認識されていたかを考え、更に沈香の木の部位の違いに関わる異称、及び、沉香の木そのものについての異称について考えてみた。本稿では前稿に引き続いてこうした異称についての問題点を更におしすすめて他の香木との混同についての問題を明かにし、且つ分析整理して、結局沉香とはどういう木なのであるかということをもう少しはっきりさせてみたい。

三、沉香の木と他の香木との混同

(一) 一木五香について

唐段成式『酉陽雜俎・前集卷一八』に、

(続) 中国古文献に見える沉香について(下)

一木五香根旃檀節沉香花鷄舌葉藿膠薰陸
一木五香あり、根は旃檀、節は沉香、花は鷄舌、葉は藿、膠は薰陸なり。

とある。この一木五香という考え方は可成り後まで行われるのであるが、このもとなったものは、『太平御覧・香部』所引の、梁世祖考元皇帝御撰とされる『金樓子』の記述である。

扶南國衆香共是一木根便是旃檀節便是沉水花是鷄舌葉是藿香膠是薰陸

扶南國の衆香は共に是れ一木で、根は便ち是れ旃檀、節は便ち是れ沉水、花は是れ鷄舌、葉は是れ藿香、膠は是れ薰陸なり。

とあるのがそれである。同じく『太平御覧・香部』所引の「俞益期賤」にも、

「外國老胡說衆香共是一木木花爲鷄舌香」「衆香共是一木木膠爲薰陸」「衆香是一木木節是青木」「衆香共是一木木根爲旃檀」「衆木共是一木木心爲沉香」

「外國の老胡説くに、衆香は共に是れ一木にして木の花は鷄舌香爲

り、「衆香共に是れ一木にして木の膠は薰陸爲り」「衆香は是れ一木にして木の節は青木なり」「衆香共に是れ一木にして木の根は旃檀爲り」「衆木(香)共に是れ一木にして木の心は沉香爲り」

とある。ここに言う青木とは青木香のことで、李時珍は『本草綱

目・木香釋名』の項に

木香草類也本名蜜香因其氣如蜜也緣沉香中有蜜香遂訛此爲木香耳昔人謂之青木香後人因呼馬兜鈴根爲青木香乃呼此爲南木香

木香は草類なり。本は蜜香と名づく、其の氣の蜜の如きなるに因るなり。沉香の中に蜜香のもの有るに縁りて遂に訛して此を木香と爲すのみ。昔しの人を青木香と謂う。後の人は馬兜鈴の根を呼んで青木香と爲したに因つて乃ち此を呼んで南木香と爲す。

と書いている。また『古今圖書集成・草木典』所引の「王世懋花疏」は、木香について、

木香惟紫心小白者爲佳圃中有架宋人絶重餘醺香今竟不知何物疑卽是白木香耳今所謂餘醺白而不香定非宋人所珍也

木香はは惟れ紫の心にして小さく白き者を佳しと爲す。圃中に架有りて、宋人餘醺香を絶重す。今竟に何物を知らず、疑うらくは卽ち是れ白木香のみ。今謂う所の餘醺は白くして香せ不。定めて宋人の珍とする所に非ざるなり。

とある。餘醺は恐らく餘醺のことであつて、唐代に撰せられた

『輦下歲時記』(重校說郛第六十九所収)に、

長安每歲諸陵當以寒食薦餗粥鷄毬等云云或賜宰臣以下餘醺酒卽重醺酒也

長安、每歲、諸陵當に以て寒食に當るに餗粥、鷄毬等を薦す云云。或いは臣宰以下に餘醺酒を賜う。卽ち重ねて醺したる酒なり。

とある所を見るともとは酒の名であつたらしい。しかしここでは「有架」とあるから蔓草の一種の名であらう。故に「王世懋花疏」の場合も木香というのは草類の植物であつて沉香を思はずような木樹ではないようである。また同じく『古今圖書集成』所引の

『王象晉羣芳譜』には、

木香灌生條長有刺如薔薇有三種花開於四月惟紫心白花者爲最香馥清遠高加萬條望若香雪他如黃花紅花白細朶花白中朶花白大朶花皆不及

木香は灌生し、條は長く刺有りて薔薇の如し。三種有りて花は四月に開く。惟だ紫心にして白花の者のみ最も香馥清遠と爲り。高く萬條を加えて望めば香雪の若し。他は、黃花、紅花、白細朶花、白中朶花、白大朶花の如きは皆不及はす。

とある。この記述も「王世懋花疏」とほぼ一致し、「高加萬條望」というのも「高架萬條」のことであらう。しかしその種類は花の色によつて三種に分けられ、そのうち最もよいとされる白花のものの中にいくつかの種類に分けられるというのである。いづれにせよこの場合も木香は蔓狀の草本である。また『本草綱目』所引の「南州異物志」には

青木香出天竺是草根狀如甘草也

青木香は天竺に出ず。是れ草根の狀は甘草の如きなり。

とある。つまり木香と呼ばれる青木香というものは、本来樹木ではなく草類であつて、旃檀とか薰陸とかとは全く別のものであるということがこれからも解かるう。しかし唐の王懸河「三洞珠囊」には、

五香者即青木香也一株五根一莖五枝一枝五葉葉間五節故名五香
燒之能上徹九天也古方治痢瘡有五香連翹湯內用青木香

五香は即ち青木香なり。一株に五根あり。一莖に五枝あり。一枝に五葉あり。葉間に五節あり。故に五香と名づく。之を焼けば能く上りて九天に徹るなり。古方では痢瘡を治するに五香連翹湯有り。内に青木香を用う。

とある。或いは、宋王観国『學林・卷八』に、

古樂府詩曰氍毹氍毹五木香迷迭艾納與都梁觀國按畫圖本草引道書之青木香爲五木香故古樂方有五香散而其方中止用青木香則五木香乃青木香也

古樂府詩に曰く、『氍毹氍毹五木香、迷迭艾納與都梁、』觀國按ずるに、畫圖本草は道書の青木香を引いて五木香と爲す。故に古樂の方に五香散有り。而して其の方中に青木香を用いるを止む。則ち五木香は乃ち青木香なり。

とある。そしてこの古樂府詩に用いられた語詞の解説としては、更に同書に、

風俗通曰織毛褥謂之氍毹後漢西域傳天竺國有細布氍毹章懷太子注曰毛席然氍毹皆蠻夷織毛之有文者如氍毹之屬也

風俗通に曰く、織毛の褥、之を氍毹と謂う。後漢西域傳に、天竺國に細布氍毹有りとあり、章懷太子は注して曰く、毛席は然り氍毹氍毹なり。皆蠻夷の織毛の文有る者にして氍毹之屬の如きなり。

とあるから五木香もおそらくは漢地の産物ではなく遠く西方のものであり、氍毹氍毹と言われるような立派な毛織の敷物、毛氍と同じく高価な財物であったと思われる。この王観国の説を受けて季時珍は『本草綱目・木香』に、

(続)中国古文献に見える沈香について(下)

古樂府云氍毹氍毹五木香皆指此也頌曰修養書云正月一日取五木煮湯以浴令人至老鬚髮黑徐鍇注云道家謂青木香爲五香亦云五木多以爲浴是矣

古樂府に云う、氍毹氍毹、五木香は皆な此れ(青木香)を指すなり。頌に曰く、修養の書に云う。正月一日五木を取りて湯を煮て、以て浴せば、人老に至るも鬚髮を黒からしむ。徐鍇の注に云う、道家は青木香を謂いて五香と爲す。亦た五木と云う。多く以て浴するに是と爲すなり。

と述べている。氍毹氍毹というのは勿論氍毹氍毹のことであろう。そして以上、五木香と謂い、五木と謂い、五香と謂うは、王観国、徐鍇の注などからも、青木香と言われる草本類の植物であるということが解る。こうした「五」という言い方は、いづれも前掲、梁元帝の『金樓子』や、唐段成式の『西陽雜俎』の一木五香が念頭に置かれていたために、それに五味、五辛などの存在に触発され流布したものであろうかと思われるが、また『俞益期賸』の五香のうちに青木香が含まれているということにも大いに関係があるう。いづれにせよ唐代あたりでは、沉香、薰陸、鷄舌、旃檀、青木香、藿香などか同一の木であると信じられていた時期があったことは確かである。

しかしこの一木五香という考え方が誤りであると表明したのは沈括『夢溪筆談・卷二十二』である。

段成式西陽雜俎記事多誕其間敘草木異物尤多繆妄率記異國所出欲無根柢如云一本五香根旃檀節沈香花鷄舌葉藿膠陸此尤繆旃檀與沈香兩木元異鷄舌即今丁香耳今藥品中所用者亦非藿香自是草葉南方至多薰陸小木而大葉海南亦有薰陸乃其膠也今謂之乳頭香五物

廻殊元非同類

段成式の西陽雜俎の記事は多く誕けり其の間草木異物を敘するに尤も繆妄多し。率むね異國に出づる所を記するに根柢無からしめんと欲。如えは一本五香にして根は旃檀、節は沈香、花は鷄舌、葉は藿、膠は薰陸と云うは此れ尤も繆なり。旃檀と沈香は兩木にして元と異れり。鷄舌は即ち今の丁香なる耳。今藥品中に用う所の者は亦た非なり。藿香は自から是れ草葉なり。南方に至りて多く、薰陸は小木にして大葉。海南亦た薰陸有り。乃ち其の膠なり。今これを乳頭香と謂う。五物は廻むきて殊なり、元と同類に非ず。

とある。また前に掲げた王観国も『學林』の中で段成式の誤りを指摘し、

西陽雜俎曰一木五香根旃檀節沈香花鷄舌葉藿膠薰陸今按此五物乃五種而謂一木五香者誤甚矣本草木部以沈香薰陸香鷄舌香藿香糖香同爲一條亦非也藿香乃草類餘香是木類亦各是一種非同條之物也

西陽雜俎に曰く、一木五香は根は旃檀節は沈香、花は鷄舌、葉は藿、膠は薰陸と、今按ずるに此の五物は乃ち五種にして一本五香と謂うは誤りなること甚し。本草の木部は、沈香、薰陸香、鷄舌香、藿香、糖香を以て同じく一條と爲すは亦た非なり。藿香は乃ち草類、餘香は是れ木類にして亦た各おの是れ一種なり。同條の物に非ざるなり。

と述べている。ここで王観国は一木五香の誤りを抱括的に指摘しているだけであるが、沈活の記述は一つ一つ具体的である。沈活はとりわけ沈香と旃檀とを並べ挙げて、この二者がもとと全く別のものであるということを述べている。そのことは別の角度から言えば一木五香という誤った考えが当時一般化しており、それを正すと

いう事の外に、沈香と旃檀との間には、両者が混同されるような特殊な認識が存在していたということを物語っているのではなからうか。

(二) 旃檀について

旃檀は『本草綱目・木部』に檀香として載すものである。その釋名に旃檀、眞檀ともし、李時珍は、

檀善木也故字從亶亶善也釋氏呼爲旃檀以爲湯沐猶言離垢也番人訛眞檀

檀は善木なり。故字は亶に從う。亶は善なり。釋氏は呼びて旃檀と爲し、以て湯沐と爲すは猶お垢を離するを言うなり。番人は訛りて眞檀と爲す。

とするが、この「檀善木也」や「亶善也」は字解か義解か韻解か明確ではない。『説文』には、「檀木也從木亶聲」「檀は木なり。木に從い亶聲」、「亶多穀也從亶旦声」(亶は多穀なり。亶に從う。旦聲)とあるのみで善の義はない。李時珍は、檀、亶が善と音韻上通ずると言っているのであらうか、判然としない。いづれにせよ旃檀は、梵文の旃檀那で Candana 或いは Chandana と表記されるものの音訳である。同様に音によって眞檀^④とも表記されるのである。唐玄應の『一切經音義』には、「旃檀那外國香木也」(旃檀那は外國の香木なり)とあるし、日本鎌倉時代の僧法空が著した『聖德太子平氏傳雜勘文・上三』の「旃檀事」の項に、

慈恩云梵具旃檀那赤者謂牛頭旃檀黑者謂紫檀之類也

慈恩云く、梵具の旃檀那で赤き者は牛頭旃檀と謂い、黒き者は紫檀の類を謂うなり。

とある。

旃檀の用途は種々あるが、いまここに少し古文献の中から拾つてみよう。晋魚豢の『三國典略』(『太平御覽・香部』所引)に、

周師陷江陵初梁主以白檀木爲梁武之像每朔望親祭之軍人以其香也部而分之

周師、江陵を陥し初めて梁主、白檀木を以て梁武之像を爲る。毎に朔の望に親しく之を祭る。軍人其の香を以てするや剖りて之を分つ。

とある。旃檀は香木であることにより、多く像などと造るのに用いられたようである。特に中国で仏教が盛んになるに随つて仏像も多く旃檀によって造られた。唐道世の撰になる『法苑珠林』に、

漢明帝時天竺國竺法師將畫釋迦像是像優填國旃檀師第四作也漢の明帝の時、天竺國の竺法師、將に釋迦像を畫かんとす。是の像、優填國の旃檀師の第四作なり。

とある。「旃檀師」というものがいかなるものか知れないが、當時は当然仏師は殆んど石を対象として彫っていた筈であるから、これは専ら旃檀を主として刻す仏師を言うのかもしれない。また沈約の『齊竟陵王題佛光記』に、

以皇齊之四年日子敬制釋迦像一軀尊麗自天工非世造色符留影妙越檀香

皇齊之四年日子を以て敬しみて釋迦像一軀を制る。尊麗なること自から天工にして世に造せらるるに非ず。色符影を留め、檀香に妙越す。

とある。これは『駢字類編・檀香』にとられたものであるが、詩

(続)中国古文献に見える沈香について(下)

の全体が見出されず、意味がよく解せない。大方の御教示を願うものである。しかし句末の檀香とは所謂旃檀仏のことであろうと思われる。旃檀仏とは元の程鉅夫の『旃檀瑞像殿記』に

佛升切利天說法優蘭王欲見無從乃刻旃檀爲像

佛、切利天に升りて法を説く、優蘭王從うこと無く見えんと欲す。乃ち旃檀を刻して像を爲る。

とあるものである。これに類する話しは前に掲げた『聖德太子平氏傳雜勘文上三』にもある。

元始抄云釋迦如來成道後八年思報摩耶恩從祇洹寺起往切利天於善法寺堂中金石之上爾時優填王勅國界内諸奇巧匠而告之曰應用純紫旃檀之木時毘首羯變身爲匠持詩刻器到於城門或見七繹或見五繹機見不同面及手足皆金色云云此以紫色爲上品歟

元始抄に云く、釋迦如來道を成して後八年、摩耶の恩に報いんと思ひて、祇洹寺從り起ちて切利夫天に往き、善法堂中の金石の上に於てす。爾時、優填王、國界内の諸々の奇れたる巧みな匠に勅して之に告げて曰く、純なる紫檀之木を用う應し。時に毘首羯摩、身を變じて匠と爲り、諸々の刻器を持して城門に到る。或いは七繹を見、或いは五繹を見る。機に見るに同じからず。面及び手足皆金色云云此紫色を以て上品と爲す歟。

以上の二話はもとと同じ話しであつたものが少し形が變つて伝つたものである。こうしてつづられた仏像が「旃檀佛」と言われるもので前掲の例文中の檀香と称された檀香仏であろう。佛の在世中あるいは涅槃に入つて八年の後に已に旃檀仏が造られていたというこうした話しの真偽はともかく、旃檀で彫られた仏像は相当古くからあつたらしい。宋の蘇軾の詩に「子由生日以檀香觀音像爲

壽詩」と題するものがあるのも時代は下るかとの例とみてよい。また時代は更に下るが清の震鈞撰『天偶檀聞』に、

檀旃寺本名宏仁以旃檀佛像所在俗呼爲檀旃云其像元代供大内明代供鷲峯寺乾隆間移此此像與石鼓皆起於周代至今三千年巍然無恙庚子之亂寺燬像不知所存

檀旃寺、本は宏仁と名づく、旃檀の佛像の在る所を以て俗に呼びて檀旃と爲して云う。其の像、元代に大内に供せられ、明代には鷲峯寺に供せらる。乾隆の間に此に移さる。此の像、石鼓と與に皆な周代に起りて今に至ること三千年、巍然として恙が無し、庚子の亂、寺燬け、像の在る所を知らず。

とある。「此像與石鼓皆起於周代」というのは些か荒唐無稽ではあるが、さきにあげた「旃檀佛」というような言葉が一つの独立した固有名詞となつてく有りよう、事由が解らうというものである。

以上文献の上で見てきたような旃檀に彫られた佛像が、いったいどれぐらいの大きさのものであるか詳らかではない。しかし中国の寺廟に安置されている佛像は一般的には可成り大型のものが多い所からみて、これ等の像も相当大きなものであつたであらうと推察出来る。結局旃檀の木は、そうした大きい仏像を彫り造ることが出来るぐらいの太木であるということと言えるであらう。故に『太平御覽・香部』所引の『竺法眞登羅山疏』に、

旃檀出外國元嘉末曾城有人於山見一大樹員蔭數畝三丈餘圍辛芳酷烈其間枯條數尺授而刃之乃白旃檀

旃檀は外國に出ず、元嘉の末、曾つて城に人有りて山に一大樹を見。圓蔭數畝、三丈餘圍え、辛芳酷烈、其の間の枯條數尺、授けて之を

刃れば乃ち白旃檀なり。

と見えるのはその事をよく表わしている。また唐の『玉堂閒話』にまた唐の『玉堂閒話』にも

劍門之左峭巖間有大樹生於石縫中大可數圍枝幹純白皆傳曰白檀樹

劍門の峭巖の間、大樹有りて石縫に生ゆ。大なること數圍なる可し。枝、幹は純白にして、皆傳えて曰く、白檀樹なりと、

とある。「數圍(かかえ)」の大樹とは相当の太木である。また唐玄奘の『大唐西域記・秣羅矩吒國』の条に、

國南濱海有秣刺耶山崇崖峻嶺洞谷深澗其中則有白檀香樹栴檀婆娑樹類白檀不可以別唯於盛夏登高遠矚其有大蛇縈者於是知之猶其木性涼冷故蛇盤也既望見已射箭爲記冬蟄之後方乃採伐

國の南の濱海に秣刺那山有り。崇き崖、峻しき嶺、洞谷深澗なり。其の中に則ち白檀香樹、栴檀^④婆娑樹有り。樹類は白檀なり。以て別る可からず。唯だ盛夏に、高きに登りて遠矚すれば、大なる蛇の縈れる者有り。是に於て之を知るのみ。猶お其の木性涼冷なるがごとき故に蛇盤るなり。既に望み見るのみ。箭を射て記と爲し、冬蟄の後、方に乃ち採り伐る。

とある。この場合も「登高遠矚」というのであるから、その木は相当大きなものでなければならぬし、また「射箭爲記」というのは、その幹も可成り太いものであるということ物語っている。尤もこの文章は、「不可以別」というのが、白檀香樹と栴檀婆娑樹とのことなのか、或いはその二種の樹と他の種類の樹とのことなのかよく解せない。例え前者の場合でも、区別がつかないとい

うことは幹の太さなども含めた樹形がよく似ているからであると解せば、いづれの場合でも栴檀の木は相当の太木であるということになる。また王維の『六祖能禪師碑』に、

林是栴檀更無雜樹花惟蘄蔔不用餘香

林は是れ栴檀、更に雜樹無く、花は惟だ蘄蔔、餘香を用いず。

とある。林という概念は、樹木が密生しているということばかりではなく、その一本一本の木がある程度の樹高を持っているということも含まれよう。故にこの文から想象される栴檀もある程度以上の太木ということになる。『陳書・列傳第一』に、

至德二年乃於光照殿前起臨春結綺望仙三閣閣高數丈竝數十間其窗牖壁帶懸欄檻之類竝以沉香木爲之

至德二年、乃ち光照殿の前に、臨春、結綺、望仙の三閣を起つ。閣の高さ數丈、並らび數十間、其の窗牖、壁帶、懸欄、欄檻の類、並に沉香木を以て之を爲る。

とある。この「沉香木」というのは「沉香木及び檀香木」という事であろうか。或いは沉香木か檀香木かはつきりしないので両木の意を込めてこう表現したのかもしれない。即ち、「沉香木とか檀香木の類」の意とも考えられる。しかしどちらの場合でもこれ等の木が、大きな建築物の資材として用いられるべき材木を採り得る程度の大木であるということはいえる。また唐の詩人、貫休の『游金華山禪院』という詩にも

茲地曾棲菩薩僧栴檀樓殿瀑崩騰

茲の地、曾つて菩薩の僧棲み、栴檀の樓殿瀑崩として騰る。

(続) 中国古文献に見える沈香について (下)

とあり、この場合も樓閣建築の資材として栴檀が使われている。これらのことは、栴檀の木が、ただ巨木であるというばかりでなく、建築材としての木質の堅さもそなえていたということを意味している。また宋の洪芻『香譜』には、

杜陽編宣州觀察使楊牧造檀香亭子初成命賓落之

杜陽編宣州の觀察使、楊牧は檀香の亭子を造る。初めて成るに賓に命じて之を落す。

とある。「亭子」というのがどれぐらいの大きさのものかわからないが、その用いられた材木はすべて檀香であったというのである。

以上、とりたてて栴檀といい、檀香とことわるのは、当然その材には他の材と異なる特質があった筈で、それがとりもなおさず芳香である。栴檀とは、芳香を備え、質としても堅固な極めて良質にして貴重な巨木だったのである。

(三) 檀香について

前項では栴檀について述べて来たが、掲げた引用文の中で、沈約『齊竟陵王題佛光記』、『陳書・張貴妃』、『洪芻『香譜』では栴檀ではなく檀香と記されていた。栴檀と檀香の違いは詳らかではないが、その字面から栴檀は概念的にその木の方に重点が置かれ、檀香はそれに含まれる香の方に重点が置かれているのであろう。その点では栴檀の中で薬材の効力を果し得るのは木そのものよりもそれに含まれる香分の方であるから、各種『本草』は項目名としては檀香をあ

げたのであろう。しかし宋代では聞香の風が非常に流行する為に旃檀の木そのものも檀香と呼ばれるようになり、『香譜』などの記載では建築材として使われるようなものも檀香と呼ばれているのである。よって旃檀も檀香も結局は同じ物でその期待される点が材にあるか香にあるかの違いによっていい。

文献の上では旃檀にはいくつかの種類がある。『本草綱目・集解』には、

頌曰檀香有數種黃白紫之異

頌に曰く、檀香に數種有り。黄、白、紫の異なり。

という。また『一切經音義』には、

旃檀那外國香木也亦白紫等數種

旃檀那は外國の香木なり。赤、白、紫等の數種有り。

とある。いままで挙げてきた引用文で、『雜勘文』では牛頭旃檀、紫檀、『三國典略』では白檀木、『竺法真登羅山疏』では白旃檀、『大唐西域記』では白檀香樹、旃檀儻婆樹、『玉堂閒話』では、白檀樹とある。牛頭旃檀は、同じ『雜勘文』所引の『小嶋大般若音訓』にも

牛頭旃檀者慈恩云赤旃檀也

牛頭旃檀なる者は、慈恩云く、亦旃檀なり。

とあるが、この言い方はそう一般的なものではないらしい。故に極く一般的な種類としては白檀、黄檀、紫檀の三種である。こうした色による種類別の認識は相当古くからあったようで、六朝時代、晋の崔彪の『古今注』にも、

紫檀木出扶南色紫亦謂之紫檀

紫檀木は扶南に出ず。色紫なるものを亦た之を紫檀と謂う。

とある。しかしこのように色によって分けられた種類の違いは、果して木そのものも違いからくるものなのか、或いは木の部位による違いなのか、あるいは同類同種の木であっても、その木それ自身がつもつそれぞれの筒体差によるものか判断としない。ただ宋の葉廷珪の『香譜』には、

皮實而色黃者爲黃檀皮潔而色白者爲白檀皮腐而色紫者爲紫檀其木并堅重清香而白檀尤良

皮實にして色黄なる者は黄檀爲り。皮潔くして色白なる者は白檀爲り。皮腐りて色紫なる者は紫檀爲り。其の木并に堅く重く清香ありて白檀なるは尤も良し。

とある。これから考えるとやはり、色による分類も結局は同種の木で、その筒体差による皮の色に違いによってそれぞれの名称の違いがあるようである。しかし王佐格の『古要論』には

紫檀諸溪峒出之性堅新者色紫有蟹爪文新者以水浸之可染物

紫檀は諸々の溪峒、之を出す。性堅く新しき者は、色紫にして蟹の爪の文有り。新しき者は、水を以て之を浸せば物を染める可し。

とあって、「皮腐而色紫者爲紫檀」という香譜の記述とは反対になっている。これは恐らく当時の漢民族が実際に旃檀の原木を見る機会が殆んどなかったことからくる認識の混乱をよく表わしている。

檀香は多く香料として用いられたのであるが、洪芻の『香譜』には、檀香、白檀香という二種類の香名が用いられている。例えば、

「唐化度寺牙香法」、「延安郡公藥香法」、「牙香法」、「又牙香法」、「印香法」などには白檀香が用いられ、「蜀王薰御衣法」、「供佛濕香法」、「牙香法」の二種、「印香法」の一種、「梅花香法」、「衣香法」、「毘子香法」などでは檀香が用いられている。この場合の白檀香といひ、檀香というは、それぞれの用に違ふのかははっきりしない。しかし『本章・集解』の、「白檀尤良」や「皮潔而色白者爲白檀、皮腐而色紫者爲紫檀」というような記述からみて、白檀は上物で、紫檀香はグレードのより落ちるものを言うのでもあらうと思われる。黄檀香についての記述はあまり見当たらないが、明の『屠隆考槃餘事』に、「黄檀香」として、

黄檀者佳茶浸炒黄去腥

黄檀なる者は、佳茶に炒黄を浸せば、腥を去る。

とあり、あまり重要な香材としては用いられていないように思われる。

また檀香には、例は極めて少ないが、他の香材と同様薬材としても用いられていた。『雜勘文』には、

惠苑云旃檀唐云與樂謂白能治熱赤能治風故云與樂也

惠苑云く、旃檀は唐に與樂と云う。白は能く熱を治し、赤は能く風を治すと謂う。故に與樂と云うなり。

とある。可成り大雑把な効能である。また『華嚴經』には、

以白旃檀塗身能除一切煩惱得清涼

白旃檀を以て身に塗すれば能く一切の煩惱を除き、清涼を得。

とある。これなどは『瑜祇經灌頂悉地品』に、

(続) 中国古文献に見える沈香について (下)

黄檀常護摩五部四接等菩薩爲使者順意皆能辨
黄檀は常に五部四接等の菩薩を護摩し、使者と爲りて意に順い皆能く辨す。

とあるのと通じるものがあり、仏教と旃檀との結びつきは非常に強いものであるということが解る。それは仏像が多く旃檀を材として彫られたということにも起因していよう。そして更にこれは旃檀の産地とその中国への将来のルートが仏教のそれと一致しているということにもよるであらうと思われる。『華嚴經』は更に旃檀について、

出離垢山若用塗身火不能燒也

離垢山に出ず。若し用て身に塗せば火も燒く能はざるなり。

とある。洪芻の『香譜』に、「牛頭旃檀從離垢出若以塗身火不能燒出華嚴教」というのはこのことを言っているのである。また『太平御覽・香部』所引の『杜寶大業錄』に、

隋有壽禪師妙醫術作五香飲濟人沉香飲檀香飲丁香飲澤蘭飲甘松飲皆以香爲主更加別藥有味而止渴兼補益人也

隋に壽禪師有り。醫術に妙なり。五香飲を作りて人を濟う。沉香飲、檀香飲、丁香飲、澤蘭飲、甘松飲、皆香を以て主と爲し、更に別藥を加う。味有りて渴を止め、兼ねて人を補益するなり。

とあるがこれも藥効ははっきりしていない。今謂う所の清涼飲料のようなものであらうか。氣分的に爽快さを与えるのであらう。そういう意味では、『本草』で李時珍が

道書檀香謂之浴香

道書に、檀香は之を浴香と謂う。

といっているように、道家道教人士の間では、檀香の湯に身を浸すことは、その身を浄め、仏界に近づく為の一つの手段と考えられていたらしいことと軌を同じくしたものである。

檀香の薬効としての本格的な記述はやはり『本草綱目』である。

その「白旃檀・主治」に、

消風熱腫毒治中惡鬼氣殺蟲煎服止心腹痛霍亂賢氣痛水磨塗外賢并腰腎痛處散冷氣引胃氣上升進飲食噎膈吐食又面生黑子每夜以漿洗拭令赤磨汁塗之甚良

風熱、腫毒を消し、惡鬼の氣を治中し、虫を殺す。煎じて服せば、心腹の痛、霍亂、賢氣の痛を止む。水に磨りて、外賢、并せて腰腎の痛處に塗すれば、冷氣を散じしめ、胃氣を引き上げて上升せしめ、飲食を進ましめ、吐食を噎膈せしむ。又面に黒子生ずれば、毎夜漿水を以て洗ひ拭ひて赤からしめ、汁に磨りて之に塗すれば甚だ良し。

とある。これも甚だ精神的な効能で、飲用したり、患部に塗ったりすることによって、氣分的に楽になるといっており、前掲の壽禪師の五香飲と何等変る所はない。また李時珍は「紫檀」の項の「主治」に、

摩塗惡毒風毒刮末傳金瘡止血止痛療淋醋磨傳一切卒腫

惡毒、風毒に摩り塗り、末に刮りて金瘡に傳せば、血を止め、痛を止め、淋を療す。醋に磨して一切に傳せば腫を卒せしむ。

とする。以上は弘景、藏器など先入の主治をまとめたものであるが、あまりはっきりとした薬効は挙げられていない。同じく李時珍は「発明」の項に、

白檀辛温氣分之藥也故能理衛氣而調脾肺利胸膈紫檀咸寒血分之

藥也故能和營氣而消腫毒治金瘡

白檀は辛にして温。氣分の藥なり。故に能く衛氣を理えて脾肺を調し、胸膈を利す。紫檀は咸にして寒。血分の藥なり。故に能く營氣を和し腫毒を消し、金瘡を治す。

とするが、これももとより極めて抽象的な効力を掲げるところとどめている。

檀香は、いままでの文献の記述に、沈香のように「焼」によって処理するという事は全くなかった。大谷光瑞がその著書、『濯足堂漫筆』の中で言うように、

蓋し沈香は之を燃焼して香氣始めて高し。燃焼せざれば香なきにあらざるも、著しからず。栴檀は之を燃焼せざるとも香氣遠く及ぶ。

のである。燃焼せずしてその香を常に発散させるということは、焼、煮などの火による熱処理によってそのエキスを抽出する機会を与えられないか、或いはエキスとしての凝結を分離し難いということとを意味しているよう。故に薬としてはエキスではなく、全体に稀薄に散在する原物そのものとして用いられることが多く、その効もあまり高いものではなかったであろう。更に何よりも旃檀が、そのままで雅やかで強烈な芳香を放つものならば、そのままの芳香を、そのままに利用するという方が自然で、それを芳香の消滅するかの如き方法でエキスを抽出するという手間はとられなかったのも当然であったにちがいない。総じて檀香は薬材としてはあまり強力な効果を期待されるべきものではなかったようである。

旃檀は『本草・集解』に、

江淮河朔所生檀木即其類但不香爾

江淮の河、朔る所に檀木生う。即ち其の類なり。但し香せず。

とあるから江淮の地には旃檀に類する木があるが、それらは香りが無いというのである。どうも沿海州から中原の地にかけての古来伝統的な漢族の地には芳香溢れる所謂旃檀の木は存在しなかったようである。旃檀が南方の産物であるらしいことは『宋史・地理志』に、

廣州都督府南海郡清海軍節度貢胡椒石髮糖霜檀香肉豆蔻丁香母
子零陵香補骨脂舶上茴香沒藥沒石子

廣州の都督府、南海郡清海軍の節度、胡椒、石髮、糖霜、檀香、肉豆蔻、丁香、母子、零陵香、補骨脂、舶上茴香、沒藥、沒石子を貢ぐ。

とある所からも理解出来る。また『晉書・穆帝紀』に、

升平元年扶南天竺獻旃檀馴象

升平元年、扶南天竺、旃檀、馴象を獻ず。

とあるから、旃檀は扶南以南、天竺にかけてがその産地であるらしい。また『唐書・西域伝』にも、

天竺國以貝齒爲貨有金剛旃檀鬱金與大秦扶南交趾貿易

天竺國は、貝齒を以て貨と爲し、金剛、旃檀、鬱金有りて、大秦、扶南、交趾と貿易す。

とある。これで見ると旃檀の原産の地はやはり天竺で、扶南はその貿易中継の地であつたらしいことが解る。また『唐書・南蠻傳』に、

單單國木多白檀。

(続) 中国古文献に見える沈香について(下)

單單國の木は多く白檀なり。

とある。「單單」というのは南蠻の國名で、同じく『唐書・南蠻傳』に、

單單在振州東南多羅磨之西

單單は、振州の東南、多羅磨の西に在り。

とあるが、振州は現在の海南島の西南端である。よつてその産地は天竺、即ち印度からビルマ、タイを経て、扶南、即ちベトナムへかけての一带であつたことが解る。よつて『本草綱目・集解』に

按大明一統志云檀香出廣東雲南及占城眞臘爪哇渤泥暹邏三佛齊
回回等國今嶺南諸地亦皆有之樹葉皆似荔枝皮青色而滑澤

大明一統志を按ずるに、云く、檀香は、廣東、雲南及び占城、眞臘、爪哇、渤泥、暹邏、三佛齊、回回等の國に有り。今嶺南諸地、亦た皆これ有り。樹葉は皆荔枝に似て、皮は青色にして滑澤あり。

とあるのと一致する。しかしまた一方で、同じく『本草綱目・集解』は、

恭曰紫眞檀出昆侖盤盤國雖不生中華人間遍有之

恭曰く、紫眞檀は昆侖、盤盤國に出ず。中華に生ぜずと雖ども人間に遍くこれ有り。

と書き、紫檀の木は、盤盤國はともかく、西方の昆侖にも産つてゐる。以上からみると結局旃檀、白檀、或いは檀香と呼ばれるものは、当時の認識として、華夏の地には産せず、アジア大陸を取まぐような形で天竺から広東に到る南方、及び天竺から更に山脈を超えて北方の、中国の地から見れば所謂の西域にかけての地に産

し、それ等が時に海路を経て、時に陸路を経て漠地にもたられものということであった。

四、沉香と檀香の混同

扱て、ここで再び沉香について考えて見なければならない。前稿で記した如く、大谷光瑞は『濯足堂漫筆』の中で、「(沉香の木)は百尺に達する常緑喬木なり。樹身は白色輕鬆にして、毫も香氣なく、既に要材にあらず、殆んど薪材の用だも爲さず。」と述べているが、にも拘らず、『事文類聚續集』には、唐の敬宗の時、波斯が沉香亭子を作る爲の材を進ったという記事がある。沉香亭子というのが如何なるものか詳かではないが、その材というのは他の建築用材と何等変る所のない普通の材で、ある部分のみ極く一部に沈香木を使っているに過ぎないというような類のものであれば、何もわざわざ波斯がそれを進ることもなかったであろうから、これはやはり亭全体を作る爲の沉香の木による材ということなのであろう。そうすると光瑞という所の、「既に要材にあらず、殆んど薪材の用だも爲さず」とは全く相い容れぬ。矛盾する。そこで考えられることは、恐らくこの波斯が進った沉香亭子の材は、実は沉香の木による材ではなく、旃檀による材ではないのかということである。何故なら当時の香木でありながら建築用材ともなり得るものは旃檀しか考えられないからである。そう考えると、『天寶遺事』にある、沉香を以て閣を作ったり、『異苑』に登場する八尺の沉香の板床の存在がはじめて理解出来る。つまりこれ等もみな本当は沉香ではなく旃檀

なのである。即ち沉香と旃檀が混同されているのである。更に沉香は、『國史纂異』にいうように、「(沉香の木は)その生なる者は香無く、唯だ朽する者にして始めて香りす」であり、しかも光瑞が示摘するように、「沉香は、之を燃焼して香氣始めて高し」であるから、たとえ香部を含んだ沉香の木であっても、それを建築の材料として用いることは殆んど意味がないことになる。この点からも建築用材に当てられたものは実は沉香の木ではなく、光瑞が「燃焼せざるも香氣遠く及ぶ」ところの旃檀であったであろうことが推察される。

沉香、檀香が混同される原因はいくつか挙げることが出来る。まず第一に、今まで已に述べて来たことがあるが、両者それぞれ香の引き出し方は異なるもののともに香材として重んじられて来た。第二に、両者とも草本ではなく原木は巨木である。そして第三には、両者とも産出地は東南アジアから天竺にかけての南方である点である。例えば『梁書』に、沉香は林邑国に産するとあるが、林邑は占婆、或いは占城のことで現在のベトナム北部の沿海地方に当る所である。また『古今図集成』に引かれた『蘇頌』には、沉香は南海の諸国、及び交、広、崖州に産出するとかかれている。この交州というのは隋の時代は交趾とも呼ばれ現在のベトナム北部ハノイ附近である。広州は現在の広東省の省都、崖州は梁の時代に置かれた州の名で海南島の北東端に当る。それに沉香の産地としてよく文献に出て来る日南、或いは日南郡というのは現在の中部ベトナムに当る。一方檀香の方も、『宋史・地理志』に、広州都督府、南海郡清海軍

の節度が檀香を貢いだとあるからこちらも広州あたりにして手に入るものの出来るものであったのであろう。尤も『普書・穆帝紀』には扶南天竺が旃檀と獻じたとあるから原産地は天竺、即ちインドで、それが扶南、即ちベトナム南部を経由して広州に持ち込まれたということ物を語っているのかもしれない。『唐書・西域伝』の、天竺國は旃檀を介して大秦、扶南、交趾と貿易をしていたという記述はその事実を立証するものである。同じく『唐書・南蠻傳』の單國には白檀の木が多いという記事は、單々が振州、即ち海南島西南部の港町に近い所であるという所から、この單單も或いは檀香のインドからの中継地であることを示しているであろう。そして海南島の振州から丁度対角に当る東北に沉香が産出するという崖州があるのである。崖州が果して沉香の原産の地であるのか、或いはこれまた檀香の場合に考えられたように一中継の地に過ぎなかったのかは定かではないが、沉香と極めて深い関わりを持つ地のごく近くに檀香と深く関わりのある地があったことは確かである。さきに掲げた『本草綱目・集会』に引かれた『明一統志』の、檀香は広東、雲南、占城、真臘、爪哇、渤泥、暹邏、三佛齊、回回などの国で産出されるという記述のうち、真臘はベトナム中部、渤泥は、『宗史・外國傳』に、

渤泥國在西南太海中太平興國二年遣使表貢

渤泥國は西南の大海の中に在り。太平興國二年、使を遣わして表貢す。

とある国で、現在の西沙諸島かヒリピン群島の一つかもしれない

(続) 中国古文献に見える沈香について(下)

い。また三佛齊というのは、『宋史・外國』に「三佛齊傳」があり、三佛齊國蓋南蠻之別種與占城爲鄰居眞臘閩婆之間
三佛齊國は蓋し南蠻の別種なり。占城と鄰居を爲す。眞臘、閩婆之間にあり。

とする。また爪哇は、『元史』に、「爪哇傳」として載すもので、マレー諸島の一つとされる。また暹邏というのは『宋史・陳宜中列傳』、『元史』などにその記載を見ることが出来る国で現在のタイである。回回については、『正字通』に、

回回國名西域大食國種也陳隋間入中國明丘濬曰國在玉門關外萬里其俗祀天不爲像航海至廣州者始于其地創寺禮拜金元以後蔓延中國

回、回回は國名なり。西域の大食國の種なり。陳と隋の間に中國に入る。明の丘濬曰く、國は玉門關の外萬里に在り。其の俗は天を祀りて、像を爲らず。航海して廣州に至る者、其の地に始めて寺を創り禮拜す。金元以後中國に蔓延す。

とある。回回は西域の国であったが広州に海路も拓いていたようである『明一統志』の檀香の産地には天竺、即ち印度が入っていないが、回回の中に組み入れてしまっているのであろうか。因みに大谷光瑞は『濯足堂漫筆』で、旃檀について次のように書いている。

印度に於ける各種の香料中、栴檀を最も貴ぶ、殆んど之を以て香料の代表となせり。
此樹は、印度半島の雨量少き丘陵地に多く産し、マイソル王国領最も名あり。

マイソル王国領は、一般に二千尺前後の高原にして、西方に西ガード山脈の高壁を為し、雨を障ふるを以て、雨量も甚しからず。此樹の産出

適せり。

南洋諸島産せざるにあらざるも、品質印度産に遠く及ばず。

この記述の中でマイソル王国領というのが今の何處に当るのかはつきりしないが、当時の印度半島諸国の一つであったことはうたがない。印度は旃檀・檀香のこれ程最も重要な産地であったにもかかわらず、『明一統志』は何故それを入れなかったのだろうか。それはやはり、「品質印度に遠く及ばない」か、南洋諸島産のものが印度産を抑えてより多く漢地にもたらされていたということであろう。こうした現象といままで記述されてきたことを合わせ考えてみると、六朝や隋唐は明からは可成りさかのぼるのではあるが、六朝隋唐の漢人達は、檀香についても沉香と同じようにその産する所は印度抜きで東南アジア南洋諸島あたりという曖昧な把握しかしてなかった可能性もないとは言えない。こんな所にも、沉香と檀香の香木それ自身についての認識の混同が起る原因があったのではなからうか。

更に沉香は仏教か漢土に入り定着するにしたがって仏教儀礼の内にとり入れられて、仏教的莊嚴さの演出に大きな役割りを果たすことになっていくのであるが、一方で旃檀は、印度から仏教伝来の道筋を辿りながら仏具仏像という形をとりながら、西域産の旃檀をも拾い上げつつ陸路漢土へ入ってきたのであった。その結果文字通り、旃檀と沉香はその荷なわされた役割に多少の違いはあったものの仏前で混然として一体化したのであった。このことも沉香と旃檀の同一され混同される原因の一つとなったであろう。

一四

それから更に細いことをつけ加えるならば、沉香も檀香も、他の草類、獸類などから取られた香と異って、あまり効力ある薬剤としては期待されていなかったという点も両者共通している。沉香、檀香は専ら芳香を供する為のものとして二者一体となって、香のうちでは孤高の存在であった。

しかしその孤高にも序列といったようなものがなかった訳ではない。今まで挙げてきた文章でもよく見ると、檀香とあるべきものを混同して沉香と呼びなしているという例は多くあるが、反対に沉香とあるべきものを混同の結果檀香と呼んでいるという例は全くなかった。それは香そのものとしては檀香より沉香の方が格が上であった為に、グレードの低い檀香をより高級なものとのイメージで表現しようとしたために起った現象であろう。六朝以降は、所謂香は香爐の中で焼いてそれを聞くという、鑑賞、趣味の領域での活用が盛んに行われるようになる。その場合はやはり本来燃焼してのみ香を出す沉香がその主たる位置を占め、焼くことなくして常に香を出し続ける檀香はその補助的な役割にとどまるということとは肯づける。それが沉香と檀香の地位を決定的なものにしたはずである。更に沉香は、光瑞が述べているように、「蓋し樹の病より生ずる偶然のものなれば、全木に一片も発見せざること稀なりとせず」であるから、全木が香木であり、しかも『大般若經・第五百七十』に、「岸列諸樹、白檀、赤檀」とあるように、群生し、それだけで一つの叢林をつくるような旃檀とは自ずとその稀少価値はちがってこよう。よって檀香がその名称として価値の高い沉香に吸収されてしまった

としても不思議ではない。

現実には、檀香が沉香の項目で説明され、或いはまた、檀香の名称が流動的であり他の名称で呼ばれていたこともあったのではないかと推察せしめる事実を示唆してくれるものがある。それは一九七七年に、新華書店北京発行所が発行し、人民衛生出版が出した『本草綱目』で、その檀香の項の小書きの注「別録下品」に附された校者劉衡如の注である。

檀香別録下品、按唐本草、千金翼及大观、政和本草木部下品中俱无「檀香」、有「紫真檀」。唐本草及千金翼上品中沉香条俱无「檀香」、有「楓香」。但二書上品中已别有「楓香脂」条。又大观、政和本草目录沉香条下注云、「已上六（原只五种、从熏陆分出乳香）种、原附沉香下、今各分条。」观六种中有「檀香」、无「楓香」。足証唐本草及千金翼沉香条之「楓香」、实为「檀香」之誤。

檀香別録下品は、唐本草、千金翼及び大观、政和本草を按ずるに、木部下品中に俱に「檀香」は無く、「紫真檀」が有る。唐本草及び千金翼の上品中の沉香の条に俱に「檀香」がなくて、「楓香」がある。但し二書の上品中に已に別に「楓香脂」の条有り。又た大观、政和本草目錄の乳香の条の下注に、「已上六（原は只だ五種のみ。熏陸より乳香を出す）種、原は沉香の下に附す。今各々条を分つ」と云う。六種の中に「檀香」有り、「楓香」無きを觀れば、唐本草及び千金翼の沉香の条の「楓香」は実は「檀香」の誤爲るを証するに足る。

いま『重修政和証類本草・卷十二』に当たってみると、乳香の条の下注に見える「已上六種」とは薰陸香、雞舌香、沉香、詹糖香、檀香のことである。つまり檀香を含むこの六種の香は、もとは沉香の

(続) 中国古文献に見える沈香について(下)

附随物としてしか認識されていなかったのである。そして檀香は風香と呼ばれていた時期があったようであるがこうした檀香についての名称の不安定さもやがては沉香の名に収斂されてしまう一つの要因になったのではなからうか。

更に沉香と檀香が混同されていたことを実証するものは、『日葡辞書』の「Xendan」の項である。

センダン（梅檀）シナにある匂いのよい木、ある人々はこれを沈香であると言う。また、日本にあるみずみずしい香気のある木で、良材となる。（岩波書店一九八〇年『邦訳日葡辞書』）

これは中国の文献では勿論ないが、当時日本人の中に旃檀を沉香と呼ぶ人々がいたことを如実に示している。何故彼らが檀香を沉香と呼んだかは定かではないが、やはり両者とも中国からもたらされたものであり、その中国の地で檀香を沉香と呼ぶ人にかいたからであらうことは想像に難くない。

結 語

『阪南論集第二四卷一号』に掲げた拙稿で触れた『郭子横洞冥記』の沉香らしき材で舟を為った話、『杜寶大業拾遺録』の沉香で堂を作った話、また唐敬宗の時波薪が沉香亭の材をたてまつった話、或いは『天寶遺事』に見える、揚国忠が沉香で閣を作った話、また『讀世説』にみえる、唐の太宗が一夜に、沉香数十事を積み上げた山を数十列べて焼いたという話などに見える沉香は、以上の考察に

従って判断するに、どうもそれ等は、沉香ではなくて、梅檀の材であった可能性が強い。以後中国古文献に見える沉香については今一度分析しなおし、考えなおしてみる必要があるのではなからうか。

① 『重修政和證類本草』は第十二卷木部に、丁香、沉香、薰陸香、鷄舌香、藿香、詹糖香等を入れるが、李時珍『本草綱目』では藿香は十四巻の草部に移している。

② 「故字」は「故に字は」ではなく「古字」のこと、『説文』には旃について、「旃曲柄也所以旃表士衆從舛丹聲周禮曰通帛爲旃旌旃或從直」である。

③ 因みに善・檀・直の三家復源音は次の通りである。『漢字古今音集』（香港中文大學出版一九七三年による）

④ 崔詠雪『史國家具史・坐具篇』（民國七十五年・明文書局）一三六頁所引の『廣群芳譜・卷八十』にあるという、「檀香一名旃檀、一名直檀……」というのは恐らく、「一名真檀……」の誤りであろう。

⑥ 石鼓とは石鼓文のことで、籀の形をした石數箇に籀文で刻されたもので周代成王の時、宣王の時に刻されたという伝承を持つ。今北京の故宮博物館に収められているようであるが刻字表面の剝落甚しく、四百六十五字中二百五十字前後が拾えるのみと言う。全文は『古文苑』に収録されている。

⑦ 圍は大きさを表わす量詞で寛文版の『聖徳太子伝暦・推古十四年』に、同類の記事があり、その頭注に、「一圍五尺也」とある。『韻會』には、「圍、一圍五寸、又云、一圍三寸、又云、一抱謂之圍」、「莊子・人間世」に、「求狙猴之杙者斬之、三圍四圍」とあり、『經典釋文』に、「李云徑尺爲圍、蓋十丈也」崔云、圍環八尺爲一圍」とある。

⑧ 備婆は、耆婆、(Jivaka) 釋尊の弟子のことが時縛迦、時婆迦と書かれ、活・命の意という。（雄山閣『梵字事典』）

⑨ これが今日日本で俗に言うセンダンのことか、檣、檣、棟などとも書き、「あふち」ともいう。

善	上	ziàn	dàn/ziàn:/shan	djiañ/dziaen	(仙)	shàn
檀	平	d'ân	d'âm/d'an/t'an	dàn/dan	(藥)	tán
檀 ₁	上	tân	tân/tân:/tan	tan/tan	(藥)	tán
檀 ₂	平	tiân	tiên/tiên:/chen	tjian/ts'ien	(仙)	
眞	平	tiên	tiên/tiên:/chen	tjien/ts'ien	(真)	zhēn
		董同龢 上古復 原音	カールグレン 周秦上古 復原音	カールグレン 切韻 復原音	北京官話音 周法高 周秦上古 復原音	周法高 切韻 韻目 所屬現代中國語音

⑤ 天工は、人間業ではない天の力による巧みさであるとも考えられるが、ここでは切利天に召し集められた諸匠の中でも、もっともすぐれていた毘首羯摩の身を変じた匠のことを言ったものであろう。切利天の最高の巧匠の業を天工と言ったものと思われる。

(補) 参考としてここに一九七七年七月、上海科学技術出版社によって刊行された江蘇新医学院編『中藥大辞典』から、沉香、及び檀香の解説を掲げておく。

沉香 (chén xiāng)

【昇名】 蜜香(《南方草木状》)、沉水香(《桂海虞衡志》)。

【基原】 为瑞香科植物沉香或白木香的含有树脂的木材。

【原植物】 ①沉香 *Aquilaria agallocha* Roxb.

常绿乔木，高达三〇米。幼枝被绢状毛。叶互生，稍带革质，椭圆披针形，披针形或倒披针形，长五·五~九厘米，先端渐尖，全缘，下面叶脉有时被亚绢状毛，具短柄，长约三毫米。伞形花序·无梗，或有短的总花梗，被绢状毛·花白色，与小花梗等长或较短·花被钟形，五裂，裂片卵形，长〇·七~一厘米，喉部密被白色绒毛的鳞片一〇枚，外被绢状毛，内密被长柔毛，花冠管与花被裂片略等长·雄蕊一〇，着生于花被管上，其中有五枚较长·子房上位，长卵形，密被柔毛，二室，花柱极短，柱头大，扁球形。蒴果倒卵形，木质，扁压状，长四·六~五·二厘米，密被灰白色绒毛，基部有略为木质的宿存花被。种子通常一枚，卵圆形，基部具有角状附属物，长约为种子的二倍。花期三~四月。果期五~六月。

野生或栽培于热带地区。我国台湾、广东、广西有栽培·国外分布印度、印度西北、越南、马来西北。

【采集】 国产沉香的采集·选择树干直径三〇厘米以上的大树，在距地面一·五~二米处的树干上，用刀顺砍数刀，深的三~四厘米，待其分泌树脂，经数年后，即可割取沉香。割取时造成的新伤口，仍可继续生成沉香。又法，在距离地面约一米处的树干上，凿成深三~六厘米，直径约三~一〇厘米的数个

(続) 中国古文献に見える沈香について (下)



沉香
1. 花枝 2. 花

年后生成沉香，即可割取。又枯死的白木香树，有时亦可觉得沉香，此香因年代较久，含脂量高，品质较好，但产量不多。采得沉香后，再用小刀剔除不含树脂的部分，晒干后即成品。须贮藏于密闭的容器内，置阴凉干燥处，防止走油、干枯。

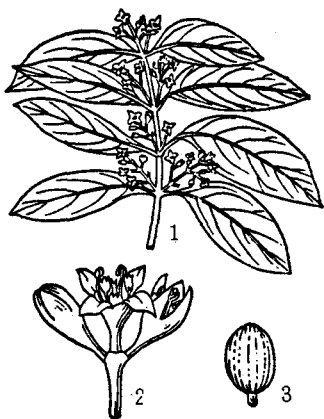
檀香 (tán xiāng)

【昇名】 旃檀(《法华真经》、《罗浮山疏》)、白檀(《陶弘景》)、白檀香、黄檀香(《本草图经》)、真檀浴香(《纲目》)。

【基原】 为檀香科植物香的心材。

【原植物】 檀香 *Santalum album* L.

常绿小乔木，高六~九米。具寄生根。树皮褐色，粗糙或有纵裂·多分枝，幼枝光滑无毛。叶对生·革质·叶片椭圆状卵形或卵状披针形，长三·五~五厘米，宽二~二·五厘米，先端急尖或近急尖，基部楔形，全缘，上面绿色，下面苍白色，无毛·叶柄长〇·七~一厘米，光滑无毛。花腋生和顶生，为三歧式的聚伞状圆锥花序·花梗对生，长约与花被管相等·花多数，小形，最初为淡黄色，后变为深锈紫色·花被钟形，先端四裂，裂片卵圆形，无毛·蜜腺四枚，略呈圆形，着生在花被管的中部，与花被片互生·雄蕊四，与蜜腺互生，略与雌蕊等长，花药二室，纵裂，花丝线形·子房半下位，花柱柱状，柱头三裂。核果球形，大小似櫻桃核，成熟时黑色，肉质多汁，内果皮坚硬，具三短棱。种子圆形，光滑无毛。



檀香
1. 花枝 2. 花序的一部分 3. 果实

野生或栽培。分布印度、马来西亚、澳大利亚及印度尼西亚等地。我国台湾

阪南論集 人文・自然科学編 第二十四卷第三号

亦有栽培。本植物心材中の樹脂（檀香泥）亦供药用、另详专条。

【采集】 全年可采。采得后切成小段、除去边材（制造檀香器具时、剩下的碎材、亦可利用）。

（一九八八年十月十二日受理）